



## 先生、物理っておもしろいんですか？

読み物  
お薦め度  
3  
☆☆☆★★

パリティ編集委員会

丸善出版株式会社, 1,600円+税 四六判 261頁

あえて「物理っておもしろいんですか？」と問いかけるということは、「物理はおもしろくない」「物理はわからない」と思っている人が世の中には大勢いるわけである。かく言う私も「そんなわけのわからんもの学んでどうする！」という親の反対を押し切り、大学では物理を専攻した。

この本では、現在物理を生業にしている人が代わる代わる出てきて、「自分がなぜ物理にはまって人生の大半を過ごしているのか」が語られている。記事を書いた人はほとんど現役の大学教授だったり名誉教授だったり、いわゆる物理とともに人生を歩むことに成功した人々である。彼ら物理に傾倒する人々は大きく三つに分けられるように見える。まず、誰からも何も言われなくても最初から物理は楽しいと感じていた人たち、次に、中高や予備校の教師や身近な人の影響で「物理はすごい」ことに気づかされた人たち、そして、自分で物理を勉強していくうちに次第にその醍醐味にはまっていった人たち。私自身はと考えると、本書にある永山國昭氏の「物理学は無矛盾」「無矛盾社会の代表が物質的自然、対して、矛盾社会の代表は人間社会」「物質的自然には首尾一貫した自然法則が貫徹しているはずである。それを探求するのが自然科学であり、わけでも物理学である。」などの記述に「そうそう」とうなずいた。大学受験の頃、私たちはまだ大した覚悟もないのに自分の人生の方向づけを迫られる。迷いがあっても何かを決めなければならない。そんなときには、矛盾に満ちた世界より無矛盾の世界に拠り所を求めたくなる。何があっても動かない基準が欲しいのだ。大人になってしばらくすると、時には矛盾に満ちた世界の面白さも味わえるようになるのだが…。

本書では多くの著者が物理の面白さを説いてい

る。説明の仕方はさまざまだが、多様性を見せる自然現象の背後に普遍的な法則を見だし、その法則で予測ができるところに物理の魅力があると説く。もちろん、誰もが自然現象の背後にある法則を見いだせるわけではない。「物理っておもしろい」と感じるには本質を見抜く、そして本質を理解することに美しさを感じる感性が必要なのだ。そして理屈を重ねてパズルを解くような遊び心も必要らしい。

本書に記事を寄せた物理学者たち（特に男性）の共通する原体験として、子ども時代におもちゃやラジオの解体趣味をもっていたようである。それらが動く仕組みを知りたくて分解せずにはいられないらしい。私の子ども時代にしばしば女の子に与えられたおもちゃは「リカちゃん人形」であり、それを分解する趣味は私にはなかった。現代のおもちゃは電子的に制御されてしまい、分解して中をのぞいても動く仕組みはほとんどわからないブラックボックスになっている。このことで物理学者の育つ下地が失われてしまわないことを願う。

本書が対象とする読者は人生の岐路において進路を迷っている若い学生だろうか。著名な物理学者が人生の方向を決めようとしていた頃にたどった思考過程を知るのは悪くない。高校や大学の教師が、自分の将来の方向性を見いだせない学生に薦める本としても良いかもしれない。人生中盤にいる読者が、学問を志した若い頃を思い出すきっかけにするのも良い。しかし本書の最高の楽しみ方は、物理学者たちが必死に物理の面白さを説明しようとしている姿勢を味わうことかもしれない。

吉田二美（国立天文台国際連携室）